



終わりの言葉にかえて

# 終わりの言葉にかえて

東日本大震災から3年目を迎え、改めて外国出身住民にとっての震災を振り返って整理すると、以下のとおりとなる。

## 震災時の外国出身住民の状況

- ・平時と比較して、地域に暮らす外国出身住民が直面する「言葉の壁」「心(文化)の壁」、そして「制度の壁」がさらに高くなり、様々な厳しい状況に置かれていた。
- ・原子力災害による母国等への避難に関わり、2つの母国の間で大きな葛藤があった。
- ・被災者(地)を「支援する」という側面も持っていた。

## 震災時の当協会の取り組みの問題点

- ・災害発生直後においては、人的・時間的な制約や通信インフラの途絶等により、多言語による災害情報の提供を十分に行うことができなかった。
- ・孤立した日本語が分からない外国出身住民に対し、効果的な対応ができなかった。
- ・各国の大使館等が自国民の避難のためのバスを手配するなど様々な活動を行ったが、その状況を把握できず支援することができなかった。

## 現在の外国出身住民の状況

- ・日本語で書かれた賠償問題等手続き書類の煩雑さと複雑さに不安を抱えている。
- ・住み慣れた土地を離れ、再度慣れない土地で避難生活を強いられストレスを抱えている。
- ・放射線に関わる夫婦、親子、母国の家族の間の価値観の違いによる軋轢に悩んでいる。

## 今回の震災から見た5つの想定外

- 1 発災時における「情報提供＝多言語」には、人的・時間的な問題から限界があったこと
- 2 発災時における「情報提供＝インターネットや携帯電話」は、停電や繋がりにくさから限界があったこと
- 3 発災時における「支援場所＝避難所での支援」には、避難所に行かない(行けない)外国人もいることから限界があったこと
- 4 災害時においては、支援者と位置づけられている組織や人材そのものが被災し、支援活動に限界が生じたこと
- 5 「地震＝建物の崩壊や津波」だけでなく、「原発事故に伴う放射線被害、そして風評被害」が発生し、しかもそれが長期化していること

今回の災害において、当協会は様々な活動を行ったが、それらは決して十分と言えるものではなかった。しかしながら、今回の災害の支援活動を通じて、外国出身住民の拠点(キーパーソン)を事前に把握し、接触を絶やさないようにしておき、いざという時に、その拠点を通じて一人一人への情報の伝達・拡散を図ることや、常日頃から大使館等との連携を取っておくことが重要であることを学ぶことができた。

また、当協会そのものが被災し、支援活動に限界が生じるという想定外のことが起こったことも指摘しなければならない。

当協会は、震災により事務所への立ち入りが制限され、外国人相談窓口として周知していた固定電話番号、ファックス、メールが使えなくなった他、外国人相談窓口として対応していたスタッフが、原発事故による一時避難のため不在となった。さらに、交通・通信インフラの麻痺及びガソリン不足により、県内の状況把握が十分にできなくなった。

このように、想定をはるかに超えることが起こるのが災害である。だからこそ、支援に携わる私たちは、想定外のことが起こった時に、迅速かつ的確に対応できるように、平時から柔軟な発想力と的確な判断力の醸成、そして顔の見える人的ネットワークの構築に努めなければならないのではないだろうか。

また、今回の災害で、外国出身住民と地域住民がともに困難な体験をし、復興への道を一緒に歩いていく中で、多くの人が外国人・日本人の枠を超えた連帯感を肌で感じているのではないだろうか。この機運を今後どのように生かしていくか、これも大きな課題である。

以上、これらのことを今回の震災及び原発事故から得られた知見として、この記録のまとめとしたい。